



子供讃歌 (三)

倉橋惣三

二 角帽生の子供遍歴 (二)

3 瀧の川學園——石井亮一氏

兩側が庭になつてゐる渡り廊下の一方の、いつもきまつた位置にひとり立つて、無表情な手拍手をうつてゐる蒼白な女の子がいた。私はその前を通るたびに、えがおで挨拶してみるが、何んの反響もない。うす曇りの午後など、時々無氣味を感じさせられることもあつたが、度々重なれば、こつちでは、何んということもない親しみの感じが湧く。彼が瀧の川學園に通つてゐる間、園長の指導を乞うて、白痴兒に對する心理實驗の仕方を多少覺えたけれども、白痴教育の經驗を積んだなどと決していえぬ。此の教育の特殊さはこの女の子において然りである。一層特殊な子どもに對しては、全く手も出せない。つまり、こゝで自ら體驗し得たものは、白痴兒教育でなくて、白痴教育のむづかしさであつたというのが、極めて正直のところである。しかし、そのむづかしさに打克つてゆく、白痴兒教育者の驚嘆すべき深愛と、驚くべき忍耐との生きた感銘を、彼の教育者としての生涯の上に永く刻み残されたのである。彼が教育的功利主義の以外に、眞の教育精神のあることを、ロマンチックでなく、リアルに教えられたのは、此の白痴院の賜であつた。その教育精神は、彼が、後に自己の教育哲學で、教育的情心と稱したところのものである。彼は、この用語を、許されるならば石井園長にデヂケートしたいと常に思つてゐる。

瀧の川學園長石井亮一氏は、彼が知る限りの典型的ゼントルマンであつた。白哲長身、秀麗な眉目と隆鼻、いつ

も、きちんと揃けづられた頭髮、折目の正しい服裝。風采のことをこま／＼と言つて失禮だが、まことに上品高雅、ともすると、異常児教育者ということに淺く聯想されそうなバツシヨネートな影などは聊かもなかつた。常に謙讓靜穩、十實行して二つも語らず、殊に、決して自己を語らず、誇張とか吹聴とかいふものが、みぢんもない紳士だ。彼が初めに學園を訪うた心もちの中には、人道感的興奮が多分にあつたと思ふのであるが、日を重ねるにつれて、泡立つ興奮のおさまつた沈潜の人道感になつた。

石井氏の場合、基督教の信仰を源泉としたその人間教育が、屢々肉親からさえも人間扱いされない最憐れむべき人の子に及んだのである。異常児心理學に擧げてある各種の白痴兒は、氏においては、異常児である前に、貴い人間であつた。石井氏がこの教育に志ざされた動機については知らない。幾度びか尋ねたいと思つたけれども、禮を失するをおそれ一度もそれに觸れなかつた。強いて觸れたとしても、自己を語らない氏から、その答を得ることは出来なかつたであろう。たゞ明かなものは、石井氏の白痴兒らに對される時の心境である。それは、崇高という一語に盡きる。そうして、治療教育學の書を幾冊讀んでも、彼などの到底企て及び得ない心境であると思つた。後に彼の恩師元良博士が、異常児教育所を建て、彼にその仕事をさせて下さるうとしたことがあつたが、それが實現に至らなかつたことは、若しそれが實現したら、五人でも十人でも、彼のところに來たかも知れない子どもたちのために、誠に幸なことであつたとしか思えない。さて、彼が、米國の有名な白痴兒教育者リチャードに就て初めて讀んだのも、石井院長の著書によつてであつた。

リチャードは、ペンシルヴァニア白痴院の院長として、自ら多くの白痴兒の教育に當つた人である。その中でも、シルベーナスという子は知能は素より、知覺、感覺、殊に觸覺さえもありやしやの幼兒であつた。リチャードは、その子にかゝりきりの根氣を以て、種々の方法を試みつゞけた。先づ一定の時間、シルベーナスを膝に抱いて、柔い布の玉を細い棒のさきにつけたもので、規則正しく軽くその頬を撫でた。シルベーナスは、まるつきり何んの感じも起きない、しかし、こうした軽い刺戟のくりかえしによつて、いつかは必ず、觸覺をよびさし得ると信じていたのである。リチャードは、この白痴兒にも、確に觸覺のあることを疑わず、それを覺醒させることを、先づ第一着手と考へたのである。幾ヶ月の根氣がつゞけられた。果して、或る朝のこと、試みにその刺戟をちよつとめて見た時、シルベーナスは、けけんな顔つきをして、リチャードの顔を見上げた。刺戟がとまつたことに氣がつくのは、刺戟に

無感覺でなくなつていたことの反證である。——リチャードは、そのまゝ、シルベータスを抱きしめたまゝ、裏の林へ馳けていつた。リチャードは感極まつて、その子をたゞ抱きしめていただけだつた。やがて、雙眼から溢れ出る涙と共に、心から溢れる感謝の祈りを神に捧げた。觸覺のほのかな覺醒。たゞそれだけのことであるが、それは、普通兒六年の小學校の課程の修行にも、たとえられる大きな教育的成功である。異常兒教育者の成功というものは、いつもそうしたものであるが、それを自分の、又、教育方法だけの成功と考へなかつたところに、此の偉大な白痴教育者があつたのである。

若い彼に、リチャードのその時の深い感激の一端さえよく分る筈はない。しかし、彼は、敬虔な石井團長において、此のペンシルヴァニアの院長を遠く想見したのであつた。又、いつも渡り廊下の一隅にしよんぼり立つて、同じ一つの手拍子行動だけをくりかえしているあの白痴少女に、心から笑顔の挨拶を忘れないことにしたのであつた。リチャードの話は、いつどこで讀んでも感激されることに相違ないが、その著者に、尊敬を以て接している最中に讀み得たことは、彼に特別の深い印象を長く殘している。感謝せずにはいられない。

4 盲啞學校の門前

彼が一時、小石川の東京盲啞學校の近くに、友人達といつしよに一軒の家を借りて假寓していたいことがある。文科の彼の他の四人は、地質學、化學、植物學、農學とそれ／＼通う大學の教室がちがつていたが、日曜日には揃つて一つところに通つていた。彼等自然科學者連は心理學には餘り興味をもたないらしかつたが、若いヒューマニストとして彼の兒童研究には深い理解をもつた。『おさなごのごとくならざれば』という聖句は、常に口にする共通語だつた。それで、彼のそこへ近所の子どもたちが遊びに来るのを、うるさがらずに寧ろ歓迎した。

近所に、盲啞學校の按針科の有名な老教授の住いがあつた。近所の縁で、彼はその人から、獨逸語の生理學書の譯讀を頼まれた。一週何度づゝか、その家へ行つて、その人と懇意になつた彼は、點字の道具を借りて來て練習した。その勉強は、老いたる盲教授の向學心に及びもつかないものであつたが、それでも、二三のお伽噺を、學校の盲兒たちのために點字して得意があつた。門前の小僧經を讀むにも到らなかつたが、自然科學者達も、それを單なるものすきとして笑ひもしなかつた。兎に角、それが彼が盲兒に觸れたはじめである。但し彼は盲兒を充分愛し得たとはいへ

ない。彼のセンチには、どうも、いぢらしさの方が先きにたつて、盲兒らと無心に遊び難かつた。たゞ、彼等の爲に、色の名のいらぬ童話をさがしたりした位だが、後から思えば、そんなことも、餘計なセンチメンタリズムだつたらしい。

當時（明治の終り近く）は、盲の教育と聾啞の教育とは、別の學校に分れていなかつた。彼には、その同じ學林の年少兒童の中でも、聾啞兒の方が交り易かつた。その特別の教育の方法の容易でないことは、盲兒と同じであるのを察したが、光りの見える子の方が、光りの見えない（？）子よりも、明るく接し易かつた。共に快活に躍れもしたし、鬼ごつこにも思い切つて駈けられた。繪も製作もいつしよに向かいあつて出來た。寧ろ、言語による觀念的抽象教育が、自然に避け得られるのが却つていゝ位だつた。

いづれにしても、感覺の一つの缺陷位で、子どもとして、そんなに變つたものでもなく（あたりまえだが）また例外抜いすべきものでもない（あたりまえだが）ことを、淺いながらに實感し得たのは、盲啞學校の門前に住んだお蔭であつた。

こうして、彼の角帽期間は、いろ／＼の子どもによつて、修業させられる機會に恵まれた。彼が後になつて、理想の子どもとか、チピカルチャイルドとかいう言葉にあまり實感がもてなくて、各々の子どもこそ、その子どもだといふ具體的兒童觀をしつかりもち得るようになったことは、此の『子供遍歴時代』（Wander Jahre）の賜だと、今でも、その時の子ども達に感謝している。